

大変な時代

石村 和 敬

徳島大学



巻頭言にふさわしいかどうかかわからないが、少し古い思い出話をいくつか。私が大学を卒業したのは昭和50年3月。その卒業祝賀会で、当時広島大学学長だった飯島宗一先生が挨拶をされた。飯島先生と言えば病理学の大家として知られ、その話には高級感があって聞く者をしんとさせる雰囲気があった。で、その挨拶

の冒頭が次の通りであった。「今はよく大変な時代だと言われる。しかし、これまで一度として大変でない時代などなかった。」若かった私はこの出だしで完全に圧倒されてしまい、その後飯島先生がどんな話をされたのかまったく覚えていない。それはさておき、あれからおおよそ40年が経過したが、なるほどその間ずっと、大変だ、大変だと言われ続けてきたように思う。

さて、卒業後、藤田尚男先生（広島大学・大阪大学名誉教授）が主宰されていた解剖学教室に入り、研究というものを始めることになった。当時まだ使われ始めて間もないフリーズ・フラクチャー法を使っての研究である。必然的に使うのは電子顕微鏡で、光学顕微鏡のことは後回しとなった。当時藤田先生の教室にあったのは日立のHU-7S型とHU-11D型電子顕微鏡で、私はもっぱらHU-11D型を使っていたが、HU-7Sとの違いは大きく、さらにH-500型が教室に入った時には、器械によってこんなにも性能というか使い勝手が違うのかと思ひ、一方で装置の進化の速さに驚いたものである。そういう点では、「大変だ」と言われる割に私達の時代はまだ「マシ」だったのかも知れない。あるいは「大変」の中にも「上・中・下」などの違いがあるのかも知れない。フリーズ・フラクチャーのおかげで面白い所見が見つかり（と言うより藤田先生が見つけてくださって）、早くも卒業の翌年には「日本電子顕微鏡学会第32回学術講演会（愛知県産業貿易館・名古屋市）」で発表する機会が与えられた。何でも初回というのは印象的なもので、その時の情景は今も忘れられない。こういう事情もあって、実は私にとっての「顕微鏡学会」は今も「電子顕微鏡学会」であり、「顕微鏡」も「電子顕微鏡」のままなのである。

それはさておき、フリーズ・フラクチャー法から電子顕微鏡の世界に入ったために、超薄切片への入門は少し遅れることになった。今でもダイヤモンドナイフは高価であるが、当

時はもっと高価であった。良質のガラスナイフを作ることの難しさ、何よりもきちんと固定、包埋し、良い切片を得ることの難しさを改めて知った。ただし、良い電子顕微鏡写真を撮ることの難しさは同じだったと思う。そしてこれは今も変わらない。

電子顕微鏡のほうに話をもどすと、最近の装置は本当に完成度高いと感じる。むしろデジタル化された部分が増えただけ、今時の若者向きに出来ていると思う。実際、彼らのほうが早く器械の操作に慣れてこちらが操作法を尋ねるようなこともある。ディスプレイ上の画像を見ながらいろいろ話することができる点も昔に比べるとはるかに便利である。ただ、欲を言うなら、あのディスプレイ画面はもう少し見やすくないかと思う。写真もデジタル。ネガを現像して、印画紙に焼き付けて、という時代と比べると、はるかに「大変」でなくなった。斯くの如く、電子顕微鏡は新人でも扱えるルーチンの器械となり、最先端の装置というわけではなくなった。超薄切片の作製もウルトラマイクロームが良くなったおかげで楽になったし、電子顕微鏡写真を撮ることは新人にとっても難しいことではなくなった。しかし、良い写真となるとそうはいかない。ここが大変なところであり、なかなか最近の若者を引きつけられないでいる理由にもなっていると思う。ただ諦めてならないのは、今時の若者の中にも必ず形態に魅力を感じる者がいることである。形態学に魅力を感じる人間はもともとそんなに多いわけではないので、少子化で若者の数が減れば、形態学をやろうという者の絶対数も減るのはやむを得ない。しかし、我々の使命はそういう少数派の若者をきちんと見つけて、私達が受け継いだ技術と知識とを伝えることであろう。学会にとって今は大変な時代だが、我慢強く次世代の若者を発掘していかななくてはならないと今更ながら思う。辛抱と努力は必ず報われると期待しているのだが、甘いであろうか。

思えば私達は電子顕微鏡の完成期と顕微鏡の多様化時代に遭遇した大変ラッキーな世代だったとも言える。電子顕微鏡を中核の一つに据えながら、顕微鏡学会が今後も持続していくことを願っている。

石村和敬 (Kazunori Ishimura)

略歴

1975年3月 広島大学医学部卒業
1977年3月 広島大学大学院医学研究科（生理系専攻）中退
1977年4月 広島大学医学部助手
1980年5月 医学博士（広島大学）
1980年7月 大阪大学医学部助教授
1989年12月 徳島大学医学部教授
2004年4月 徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部教授
現在に至る。